

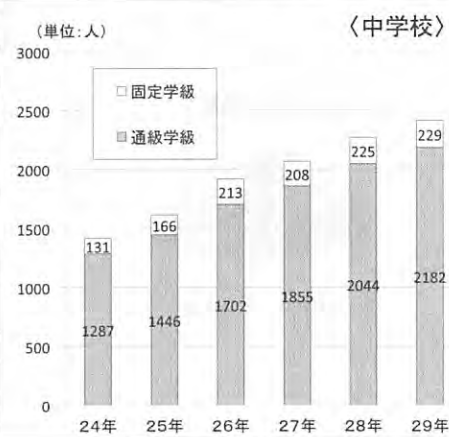
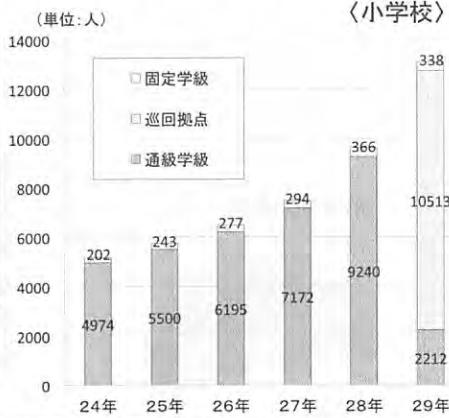
緊急特集

必読！ 都情研実態調査 報告！！

●特別支援教室体制の本格実施に向け、多くの自治体が新体制への移行を始めた今年度！この「都情研実態調査」にもすでに変化が表れています。今回は緊急特集としていち早く、全都の皆さまに報告します。

1 児童数が急増！

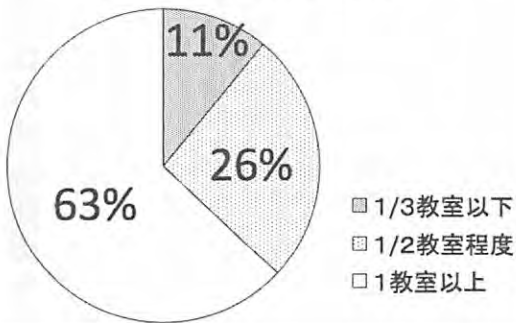
グラフ1 在籍別 児童・生徒数の推移



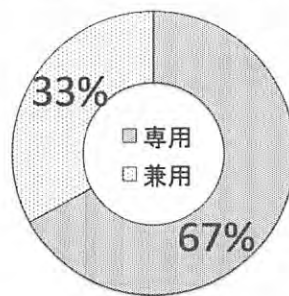
特別支援教室体制がスタートし、巡回方式が導入されることにより児童数の増加は必至です。各自治体がそれらを見越して計画的な整備が必要です！

グラフ2 小学校 特別支援教室の規模と使用状況

特別支援教室の教室規模



特別支援教室の使用状況



各校の施設は1教室以上が約6割、専用教室が約7割弱でした。また、初年度以降児童数が増え、教室が広くなったり、専用教室へと移行したりしている地区も少なくありません。

2

特別支援教室の施設規模は？

掲載内容の紹介 P3
『発達障害と愛着障害について』～子どもたちの「育ち」の支え手として～
都立小児総合医療センター 副院長 田中 哲先生

3

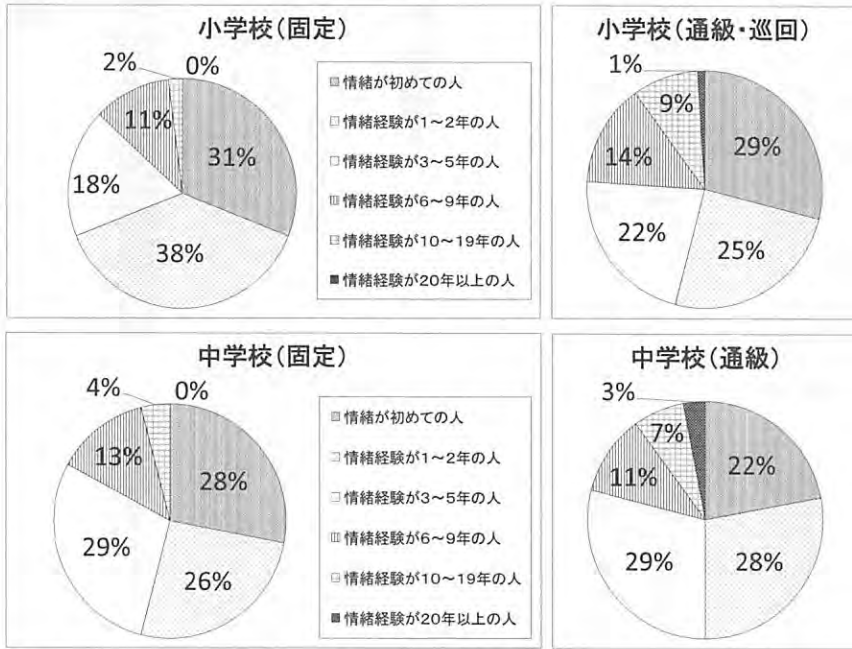
経験年数5年未満の教員が約8割！

ぜひ、都情研の研修への参加を

グラフ3 情緒経験年数別人数と割合

	小学校		中学校	
	固定	通級・巡回	固定	通級
情緒が初めての人	20	397	15	89
情緒経験が1～2年の人	25	339	14	110
情緒経験が3～5年の人	12	301	16	116
情緒経験が6～9年の人	7	190	7	44
情緒経験が10～19年の人	1	123	2	27
情緒経験が20年以上の人	0	23	0	11

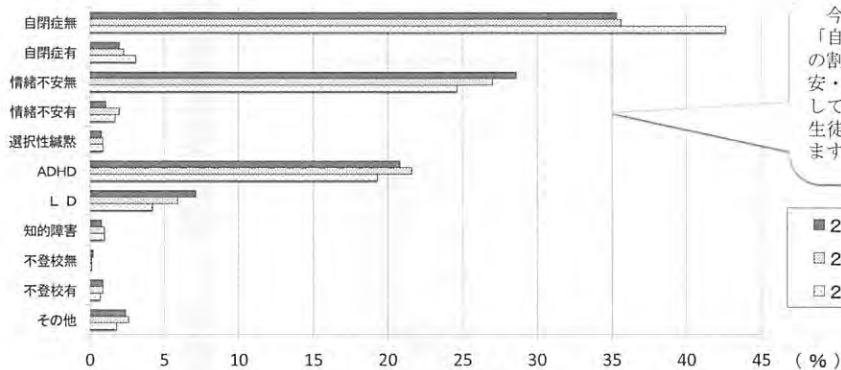
(単位：人)



特別支援教室は情緒障害教育の専門的な指導を行う場所ですが、情緒障害教育の経験が浅い教員が指導に当たっているのが現状です。経験年数の浅い者同士でチームを組み、教室を運営している教室も少なくありません。専門性向上と学級主任の経営力アップの研修が急務です！都情研の研修はここに焦点を絞っています。積極的な参加を！

グラフ4 主障害別《小学校》児童数の割合

主障害	自閉症無	自閉症有	情緒不安無	情緒不安有	選択性嫉妬	A D H D	L D	知的障害	不登校無	不登校有	その他
固定 (人数)	150	35	34	10	3	77	7	6	1	5	11
通級 (人数)	4434	227	3686	131	95	2630	910	92	24	118	306
合計 (人数)	4584	262	3720	141	98	2707	917	98	25	123	317
割合 (%)	35.3	2	28.6	1.1	0.8	20.8	7.1	0.8	0.2	0.9	2.4



今年も小中学校とも、「自閉症・知的の遅れなし」の割合が減少し、「情緒不安・知的の遅れなし」が増加しています。診断なしの児童生徒が増えていると考えられます。

たちです

4

入室児の多くは社会性指導を必要とする子ども

指導を受けている児童の障害種別は、従来通り、自閉症（知的遅れなし）、情緒不安定（知的遅れなし）ADHDの割合が高く、行動面、情緒面に課題のある社会性指導を必要とする子どもたちです。社会性の指導は小集団指導を抜きにはあり得ません。各地区、各校の指導環境の整備状況により個別指導しかできない地区も出ていますが、指導課題に対応できる環境の整備が急務となります。

また、ここ3年間で、「自閉症（知的遅れなし）」の割合が減少し、情緒不安定（知的遅れなし）の割合が増加しています。この背景には校内委員会の権限が強まった一方で、入室相談の際に医療機関等の診断も含めた十分なアセスメントがなされないまま、入室している子どもが増加していると推測します。十分なアセスメントなくして、十分な指導はできません！

平成二十九年 都情研課題研修

『発達障害と愛着障害について』

子どもたちの「育ち」の支え手として

都立小児総合医療センター 副院長 田中 哲先生

講演では、子供の心の発達や
つまずき、子供理解について発
達障害や愛着障害と関連させな
がら、分かりやすくお話をし
ていただきました。紙面に限り
があるため、お話のかなりの部
分を割愛せざるを得ず、誠に
残念です。それでも、とても示
唆に富む内容ですので、最後ま
でお読みいただき、今後の指
導に生かしていただければと願
っています。(広報担当)

子供たちの心の育ちの支え手として、
私たちはどんなふうに子供を見
ていたらよいかというお話をさせ
ていただきます。

心の発達の骨格

図1は、私が考えている心の発達
の骨格です。人間が自立するための
最低限必要な心の育ちとは何だろ
うと考えると、この三本の柱なのだ
と思います。

Aが社会性の問題です。周りど
うやってうまくやっていくか。知
らない人の間をどうやって渡って
いかないといい力です。

真ん中のBが一番中心になる柱

である自尊感情です。セルフエ
スティームという言葉がありますが、
人を評価するように自分のことも
身大に評価するという意味で、そ
れが自尊感情と訳されています。自
尊感とか自尊心とも言います。

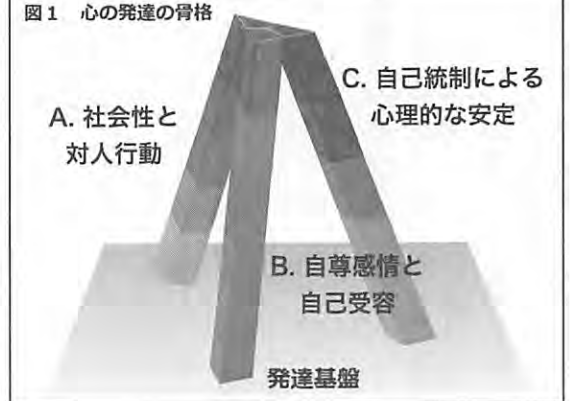
Cは、自己統制と心理的な安定
です。これはストレスに対する強さ
です。多少のことではめげない。自
分の責任をもつたことはやりきると
いう心理的なタフさです。最近の言
葉では、レジリエンスという言葉に
当ります。

この三つがうまく組み合わさると
その子、その人というのは一人前
なってくると思うのです。

幼児期の適応水準

第一段階は幼児期です。幼稚園、
保育園の子供の社会性とは、他の
子供と仲よくできるということです。
自己統制の課題は、決まりごとが守
れる、幼稚園にあるルールが守れる
ということです。自尊感情の課題は、
失敗しても見放されない安心感とい
うことになりまます。これらができ
てくるのが学校に上がり、安定して
暮らせるための必要条件なのです。

図1 心の発達の骨格



幼児教育に関わる方は「最近気にな
る子供が増えている」とよく言われ
ますが、それは、この三つの柱がし
っかり立っていないということです。
幼稚園の生活をするために、幼児期
の適応水準としてはこのレベルのも
のが要求されるわけです。これに足
らない子供は、そこになかなかつ
いていけないのです。

発達基盤

順番が逆になりますけれども、幼
児期の適応水準の下に何があるのか
ということ。建物で言えば基礎
工事のところ。親密な関係が広
がるということの基礎は何だろうと
いうところ。それは、母子関係
が中心になる乳児期です。人間の乳
児というのは、他の哺乳類と違って
何もできないですから、自分の二

足を泣いて知らせるしかありませ
ん。なぜ泣くかという自分がか
こにいるというのに気が付いてほ
しい。つまり、自分のためにいて
くれる人を側に引き付けておこう
ということなのです。人間の初め
の一年間というのは他の動物には
ないのです。その何にもできない
時期にただ泣いて過ごす。ただ
泣いて過ごす。ただ泣いてもら
うだけ。それは、この親密な関係
の基礎とも言える「自分を見放さ
ない人は必ずいる」という確信を
心に刻むためなのです。

失敗しても見放されない安心感
の下部分には、何もできない時代
に何でもやってもらえた経験とい
うものがあるはず。つまり、「自分
でもいいんだ」「自分は受け入れ
てもらえている」という感覚です。
それがあから、自分が能動的に周
りにかかわれるようになった時に
か、新しい人と付き合ってみると
いうことが可能になるのです。例
えば、いたずらをして怒られても、
見放されるわけではないということ
がよく分かっているのです。

決まりごとが守れるというのは、
自分を粹付けるといことです。何
でもやってもいい、自分を見放さ
れない。でも、自分のやることには
限度がある、さすがにやっつては
いけないことがあるということ。こ
れは、しつけされるというプロセス
身に付けているのだらうと思いま

す。しつけというのは親が関わりながら子供の枠を決めていくのです。よそに行ったら静かにしているとか、人には意地悪してはいけないとかという、子供なりの社会生活をするのに必要なことを枠づけていくわけです。枠がつくと、子供は親の関わりがないところでも、それを自分の枠とするようになるのです。幼稚園や保育園に行つて、決まりごとが守れるためには、やってはいけないことがあるのだという感覚そのものが大事なのです。つまり、幼児期に身に付くことの基礎には、何もできない乳児期にかなりしつかりかわつてもらい切つたということがあつたということなのです。

発達障害とは、この発達基盤の下の部分、基礎工事が不安定な部分です。情緒的なつながりとして自分の大事な人がいつもいてくれるということ



がよく分からないのです。そうすると、親密な関係が広がりにくいということが起こります。自閉の子供で一番目立つ、一番もつていやすい生育的な問題は、目が合わないということです。人間の赤ん坊は、おっぱいを飲みながらいつもお母さんの顔、特に目を見ているということが分かつています。つまり、自分を大事にしてくれる人からどう見られていくかということが子供にとって一番初めの視覚情報なのです。それが子供の心を形作るのに意味がないはずがありません。自閉の子供は、「あつ、この人自分を見ているんだ。だからOK」という感覚をもつことからもう十分にいけないのです。それが目が合わないということの意味合いです。基礎工事のところが弱いので、柱立てがうまく立ち上がらず、そこから上の積み上げも不安定になつてくるというのが、自閉的な子供たちの心の発達なのです。それから、決まりごとを守る、枠づけがうまくいくということに関しては、ADHDの子供たちが弱いです。枠づけようと思うと、その枠から外れようとする。外れることの方に心がいつてしまうという特徴をもつています。そういう不安定さを、この発達の基礎のところからもつていきます。そうすると、決まりが守れないという特徴になり、積み上げとしてその後の成長にまで影響していきます。

実は、愛着障害の子供も同じような特徴をもつています。それについては、積み上げの一番上まで行つた後にお話しします。

学童期の適応水準

乳幼児期、幼児期と学童期では、属している集団の質が全然違います。クラスという仲間集団は対等な集団です。その対等な集団の中で評価してもらえることが大事になつてくるのです。社会性の課題としての対等な集団の中でやっていくということ、自己統制の課題として仲間と一緒にルールを作りながら、その中でやっていけるということ、そうすることで仲間の評価してもらえることが、この時期の子供にとって重要なのだろうと思います。

最近、問題行動化する、家の中で大荒れになつて手が付けられなくなる、入院まで考えるようになってしまふという年齢がどんどん下がってきています。それだけこの下の部分不安定なのだと思ひますし、そういう子供の中で家庭の不安定さももつている子がすごく増えていきます。

思春期の適応水準

思春期で大きく変わるのは、社会性の柱の部分です。この段階で大事なことは、仲間一般ではなく、特別な対象との関係、特別な一人が現れる

ということなのです。それは自尊感情のところにもすごく関係があります。思春期になると、物事が抽象的に分かつてくるようになるので、自己認識ということが起こつてきます。そうするとみんなと違うところが目に付いてきます。みんなと違う部分はどういうところで、それは自分にとっていいことなのか悪いことなのかということが分かつてくるのです。それは全く個別の問題なので、自分とみんなとの違いを、みんなが認識してくれるということはあり得ません。それを分かつてくれる他人がいれば、その人が自分にとっての特別な対象になつていきます。社会性という観点で言うと、自分のことを分かつてくれる人が家族以外にいるというのは、子供にとってはすごく大事なことです。家族というのは自分のことを認めてくれて当たり前なので、その人に改めて認められても有り難みはあまりないからです。家族以外の人、友達、先輩、先生などが自分のことを分かつてくれて、認めてもらえると、その人が特別な人になります。その人にいい格好をしよう、その人に褒めてもらおうと思つて頑張るのです。例えば、サッカーチームのコーチに「お前すごいな」と言われると、それは自己評価に直結します。「コーチにうまいつま、どういふ集団に属し、どういふ特別な人が現れるか、どんな自

分らしさをそこで発揮するから、この時期の自分というものが決まってくるのです。これは学校に上がればみんな一斉に学童になるということとはだいぶ違って、その個別の友達、先輩、先生などが現れるかどうかで変わってくるので、思春期の入りとか、成熟の仕方というのは子供によってだいぶ違ってきます。

青年期の適応水準

青年期とは、自立の一手手前です。年代で言えば、高校生とか大学生などです。頼りになる家族や仲間、特別な親友がいない中でも自分はやっていきけるのだろうかということがこの時期の大きな課題です。その課題をちよつとかじつてみるというのがアルバイトだったり、一人暮らしだったり、一人旅だったりするのです。例えばアルバイトを始めれば、そこで起こった挫折や不安に自力で対処しなければいけません。バイトのシフトが入っていたら、学校と違って「ちよつとだるいから遅刻します」というわけにはいきません。自分で物事を決めて、引き受けてやらなければいけないのです。これは社会生活の第一歩ですが、そのために学校時代とは質の違う、相当な自己統制力が必要になってきます。そうした経験を経て、「あつ、ここで俺でやっていけるかも」というふう

最終的な積み上げ

「自分って望み通りの自分じゃないけれども、何とかこれでやっていくしかないかな」とか「この自分なら人の中でもやっていける」と思えるようになる、初めて、最終的な積み上げが起こるのだらうと思えます。職業人としてみると、自分の会社のコミュニケーションの中に自分を位置付けて、その中でやっていけるという社会性です。社会的に引き受けると言ってしまったら、それはもう自分がどんなに損をしても引き受けなければいけない。これが自己統制です。それをやっている自分が「これでOK」「何か少し社会の役に立っている」と感じながら社会にしっかりと組み込まれている感覚がもてるということですが。

ただ、その一番上に積み上げるもの、人が最終的に引き受ける役割は、仕事人としての『私』だけではありません。その大きな部分が、自分の子供と向き合うという作業です。心理的に言うと、それはすごく大きな役割で、成熟していきなるとれない人の役割です。そのためには、コミュニケーションの中で子供を育てること、子供の要求に心理的に安定して対処できること、自分が親になる腹をくくることが必要になります。

子供を育てるといふコミュニケーションは、仕事のコミュニケーションとは違います。なぜ、コミュニケーションの中で子供を育てることが大事かというと、人

間の子供は、すごく未熟だからです。親たち自身が、コミュニケーションにしっかり属していないと、子供は24時間365日手がかかるので、たちまち参ってしまいます。人間は、自分の子供を誰かに預けるといふことをします。これは、他の哺乳類はしないことです。例えば、隣のおばちゃんもお母さんと同じように優しい。おばちゃんにとつても、自分は同じように大事な子供。だから、お母さんと一緒にやって駄目なことは、おばちゃんともやってはいけないのだということですが。それが広がっていくのが幼稚園、保育園ということになります。これが、発達基盤です。子供たちの中に芽生えた心の原型みたいなものは、コミュニケーションの中で初めて芽が出てきます。少し広い人間の間で、それを発揮できるようにするので。つまり、親が直接いなくても、自分に対する肯定的な関わりがそのコミュニケーションでちゃんと支えられているということですが。それが積み上がって一番上のところの安定感で今度は、また子供に関わる。つまり、ここで人間のライフサイクル、連続性が見えてくるわけです。親の側にとつても子供の側にとつても、親がしっかりと自分のコミュニケーションと関わり、その関わりの中で子供とかわれるというものが、絶対に必要なことなのです。それが、子供に関わる安定感になっているのです。そういう意味では、人間の子供は、コ

ミュニティの中でないと育たないのです。

親ではなくても我々のように職業で子供と関わる人が安定して子供と関わり切るためにも、自分がコミュニケーションにちゃんと属していること、自分がその職業人であることを選んでいること、自分の中で安定感をもっていることが必要になるのです。

自閉の子供や多動の子供が、なぜ初めのうちから社会的な問題を起こしてしまうかというと、コミュニケーションにうまく下りていけないのです。他の人に懐けなかったり、他の人と一緒にいるルールが守れなかったりするところから問題が起こるのです。

愛着障害とはどういうことか。

子供に安定したまなざしを注ぐことで子供の発達基盤が安定し、その子供を見て親としても安定する。この双方向の矢印が成り立つことが愛着の根幹です。この形がうまくいかなくなるのが愛着障害です。そうすると、コミュニケーションに下りて行くところで問題が起こるのです。つまり、親自身がコミュニケーションにうまく下りていかなかったり、自信がなかったり、衝動性が高かったりすること、虐待、養育の問題が起こります。すると、子供がうまくコミュニケーションに降りていけないのです。その結果として子供の心の初めの段階

がうまく育たない。それが、愛着障害です。発達障害というのは、その子供自身の生物学的なバックグラウンド、発達基盤の下にあるもののせいで、これがうまくいなくなるといふことです。結果は同じなのです。子供の社会性や衝動統制、自尊心に問題が生じます。

「自尊心」の育ちと偏り

自尊心 (Self-esteem) とは、自分を見積もる、つまり自己評価といふことです。そうすると、思うようにいかない部分もたくさんあるわけですから、自分は、このままでOKなのだろうかという葛藤が生じます。それは、自尊心の柱の中心の課題です。言わば、子供にとってのbeingの課題です。beingとは、自分がどんな存在か、自分がどんな子なのかという在り方のことです。実は、それが不安定化することでdoingに関する問題と出でてきます。doingというのは、何をしますかという特性です。僕らはその子が何をし出すかというところで子供を見ます。しかし、その背景には必ずその子供がどんな子供かという問題があるといふことです。ただ、社会性や自己統制の軸に比べて、その子供のbeingがどれくらい成長して、自尊心が育って、自己認知が成熟しているかは、なかなか見えないのです。けれども、この育ちがま

づくと見えやすくなります。自分のbeingが損なわれて、自分がつまづいてしまったといふことを、子供は表現するからです。

例えば、「失敗しても見放されない安心感」を失くすとどうなるか。すごく叱られたり、大失敗をしたりして、本当に見放されるのではないかとこの思いをして、傷付いてしまうと、見捨てられることに強烈な不安をもつようになります。自分の前からお母さんがいなくなると、不安でたまらなくなると泣き叫ぶ。何か新しいことをやるのが、怖くてしようがなくて、立ちすくんでしまう。やれるはずのことも、やれなくなってしまう。また、不安が強くなる子供たちは、不安にならないために、出会ったものをとりあえずみんな敵だと見ます。そして、いろいろな攻撃をし始めてしまいます。これらは見ていると分かります。幼児たちの自尊心が傷付いた現れなのです。

学童期に不安材料になるのは、「自分一人が違っていることへの不安(疎外感)」です。子供たちは、お互いのことをよく分かっているのに、その時期のいじめみたいなことを考えると、いじめめる対象に、その子の自尊心が一番傷付くだろうと思うことをします。「お前みんなと違うよね」という、みんなと違うところをあげつらうのです。異質な他者を疎外するという行動もあります。自分の自尊心が下がってしまうと、自分が安全であるためには、自分以外の

疎外される対象を作るしかないのです。

思春期では、自分というものの違和感を感じるということが起こります。「なぜ、私はこの体をもつて、こんな性格でやっていかなければいけないのだろうか」といふように、心体、外見、能力などが全部バラバラに見えてきて、自分という一体感がなくなってしまうのです。その崩れてしまった自分の一体感を繋ぎ止めるために、彼らがやるのが自傷行動とか、ルール破りなのです。

独り立ちが課題になる青年期に「この自分でやっていける」という感覚をもてないと、依存や引きこもりの問題が起こります。お酒、煙草、ドラッグ、セックス、ギャンブルなどの依存対象に関わっていると、自分がOKなような感じがするわけです。それは決して自分を自立させてくれないのだけれど、止まらなくなってしまうというのが依存症の原因なのです。人への依存も起こり、何も依存するものがないと引きこもらざるを得なくなるということもです。

社会的な自分といふことを考えると、「自分がやっていることは社会的に全然役に立っていないのではなにか」といふふうにな不安な人は、がむしゃらに役に立っているかと思いたがります。だから、殊更に人から感謝されたがったり、そういう仕事を選んだり、無茶苦茶働いて燃え尽き

たりということが起こるだろうと思います。

子供のやっている問題行動を、子供の自尊心の傷付きという文脈で読み直してみるといふことは、大事なのではないかと思えます。

子供理解の深さと広さ

例えば、その子を発達障害や愛着障害であるといふふうには理解したとします。これは理解の一番浅い部分です。診断名が、その子供の実態を全部表しているわけではないからです。ある子がアスペルガーだといふ診断が付いても、アスペルガーの子がやりそうなことを、その子が全部やるわけではありません。

ある子供が就職の面接で「発達障害と言われたことがあります」といふ話をしたら、「そういう子供を預かるわけにはいかない」と言われた。その会社の説明は「アスペルガーの人は、自分が思うようにいかないと、無闇に人を攻撃するといふところがあるとネットに書いてあった」といふことでした。社会は名前と実態を同じくらしいのウエイトで見るわけです。

子供を理解する時に、診断名よりも、その子がどんな子供かという特性の理解が大事です。特性とは、その子供がやりそうなこと、他の子はやらないけれども、その子はどうしてもやってしまうといふことです。特性の部分も浅い部分と深い部分と

というのがあって、深い部分といのは、その子供の在り方に関わることだろうと思います。

例えば、ASDという診断を付けるためには、診断基準に照らして分類をしなければいけない。その診断基準に書いてあることは、実はほとんどこの特性の部分なのです。つい声を出してしまうとか、人とうまくコミュニケーションがとれていないとか、社会のルールが分かっていないとかということがリストになっていて、その中の何パーセントくらいが当てはまるかで診断が付くのです。特性理解から診断に至るのは、実は、今の診断基準の特徴なのです。しかし、本来の診断というのは、実態全体ですので、特性の積み上げだけで付くはずがないのです。チェックリストに幾つ以上付いたからアスペルガーという診断になるわけではなくて、その子供もっている、もう少し深い、在り方に関わることなのだと思います。

ASDの人たちというのは、社会的な判断とか、周囲の状況とか、人の気持ちよりも自分がしたいこと、自分が納得いくかどうかのウエイトがすごく高い人なのです。だから、今の状況がどうであっても、自分がこれをやりたい、これをやらないと納得できないと思ってしまうと、ついやってしまうのです。これはアスペルガーの人たちのすごく大きな在り方の特徴です。その在り方そのも

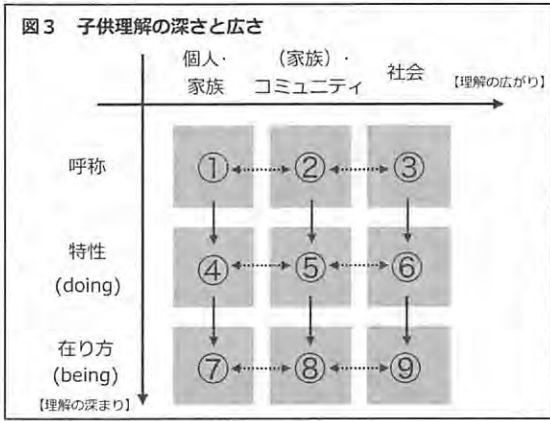
のは、悪いことではありませんし、障害であるわけではないのです。例えば、優れた研究をする人というのは、普通の人よりも自分が納得いくことへのこだわりが強いわけです。ある人にとっては、そういう自分がノーベル賞をとるために必要な資質なのです。けれども、ある子供にとっては、それが、みんなと一緒にやれない原因になっているというふうに見た時に初めて、支援とは何かが見えてきます。その子供の在り方のところまで理解ができていないと、子供全体が理解できたことにならないのだと思います。

先ほどの言い方で言うと、在り方というのはbeingに、特性というのはdoingに相当します。その理解のされ方は広がりをもっています。先ほどの就職できなかった子供のことで言うと、家族や本人は「人を傷付けるようなことはするはずがない」という理解をしていたけれども、社会の方は「アスペルガー」という名前が付いていたら人に危害を加えることもあり得る」と考えてしまったのです。その子供自身や家族が思っている自分理解と会社が思っているその子供理解が、全然違っていたのです。このギャップが問題です。コミュニティの役割は、この部分です。家庭からコミュニティ、コミュニティから社会に子供たちが羽ばたいていくのだとすれば、コミュニティは家庭と社会の間にあって、かなり役割

をもっているのです。

図3の①と②の間で起こることは、子供のハンディを学校に伝えるかどうかということ。 「うちの子、アスペルガーなんです」ということを学校に知らせて、対処してもらうかどうかということ。逆のベクトルで言うと、学校の方が問題に気が付いて、「ちょっと病院に行つて、診断を付けてきてもらつてください」ということがあるかも知れません。それは子供の理解が診断名ということ。でも、これだけでは理解が進んだことにならないのです。うちにアスペルガーの子が一人いますということがあるだけです。それだけでは別に意味のないことなのです。

④、⑤のレベルというのは、その子もっている特性にコミュニティ



が対処できるということ。コミュニティの側で、パニックにどう対処すればいいか、どうやったらパニックを起こさなくて済むようになるかという、子供理解、doingの理解、どういいうdoingで対処するかということが分かってくるというのがこのレベルです。これは大事なことです。今の私たちがやるうとして共通的課題だと思えます。

でも、その対処ができただけで、その子供がその学級や学校が自分の居場所になるとは限りません。それができるためには、⑦の理解が保障されていることが必要なのです。そのためには、子供の自分理解が必要です。学級、コミュニティの側でも子供理解が進まないと、支えられている感じがしないのです。ここが完全に支えられれば、クラス、コミュニティにとつては、その子供は、その子がいなくては考えられない、その子がいなかったら、うちのクラスではないという存在になってきます。それができた時初めて、その子供自身が「自分って、ここにいるといいんだ」と思うのです。居場所というものの本来の意味は、自分が全く自分のままでいても否定されないということですから、そういう所であるためには、ここまでの理解の深まりが必要なのだと思います。

社会との間には、まだ相当ギャップがあります。社会は、アスペルガーという名前は分かるのです。でも、

その名前からしか理解できないのです。今の社会全体では、まだこの特性理解ということが全く進んでいないからです。そういう子供が何をやり出すかということの全体が見えていないのです。ましてや、その子だからやること、その子の在り方そのものというのが、社会全体に受け止められているということ、そういう子も含めていて当たり前になるまでには、まだ結構時間はかかるし、やるべきことはいっぱいあると思います。図表の⑨に向かつての矢印が成り立つためには、まだまだ時間がかかると思います。そのためには、⑧です。我々が、その子供のBeingを支えるような在り方をしていくということが非常に大事なのではないかなと思います。

終わりに

私たちは、子供に「他にもない自分がそこに必要とされている感覚」をどうやってもたせるかということに課題にする必要があると思います。困ったことは、たくさんあります。しかし、それをやってみようから障害なのだというのではなくて、その子は、自分のどういうところが分かってほしくて、自分のBeingのどの部分を受け止めてほしくてそれをやっているのだろうかという理解の仕方が必要です。そのことでお母さんたち、学校の先生と手を組んで一緒にコミュニケーションを作ることが

きたら、その時その中心になっていくその子自身というのは、私たちの手の結び目としてなくてはならない、他でもないその人、本当に必要な人になっていくのではないだろうかと思います。

全情研五十周年記念大会東京大会を終えて

東京大会実行委員長 宇都宮 聡
府中第三小学校長

平成二十九年七月二十六日から二十八日の三日間、帝京平成大学を会場とした標記の大会が開催され、特別支援教育に取り組んでいる全国からの多くの実践者で熱い議論が交わされました。

「共生社会の形成のために果たす学校教育の役割―自閉症スペクトラムを中心とする特別支援教育における指導者の専門性とは―」の主題は、インクルーシブ教育システムの構築を進めている教育現場において、その障害特性を理解し、一人一人の発達段階における特別な教育ニーズをつかみ、自立に向けた支援や合理的配慮を求められていることを鑑み、設定しました。そして全情研発足五十年の歴史を土台に、学習指導要領改訂を機に転換期を迎えている教育界において、本大会は大きな意味があったと考えています。

最後に、本大会を開催するに当たり、文部科学省並びに東京都教育委

員会、豊島区教育委員会、都情研の会員の皆様、更には運営に当たった北ブロックの先生方、各方面の皆様にご多大な尽力いただきましたことにより成果のある大会となりました。

皆様に心より感謝申し上げ、報告とさせていただきます。

課題研修会報告

都情研企画運営本部 中村 章
八月三日、「課題研修会」が大田

区民センターで行われました。午前の部の田中哲先生のご講演に引き続き、午後の部では「特別支援教育体制がスタートして二年目！中学校は？情緒の固定学級は？」をテーマとしたパネルディスカッションを行いました。

最初に、今年度の実態について都情研調査部からの報告の後、小学校自閉症・情緒障害（固定）学級の事例として、国立市立第二小学校の両宮先生、三橋先生より報告をしていただきました。児童個々の実態に応じて、自立活動中、心のステージから、交流及び合同学習中心のステージまで、段階的に組み立てて学習を行っている取り組み等が紹介されました。

中学校支援教室（巡回）の事例としては、狛江市立狛江第二中学校の田中先生から報告をしていただきました。拠点校から三校を巡回指導しているなかで生じる、施設設備、時

間割の課題等についても述べていただきました。

後半は、フロアーを交えて、教育課程、評価評定、交流及び共同学習、自閉症・情緒障害（固定）学級と支援教室との対象・役割の違いなどについて、意見交換がされました。試行錯誤が各地区ですすむなかで、諸問題に向きあう大切さを共有できた研修会となりました。

編集後記

広報に関するご意見、ご感想がありましたらお寄せください。

編集・発行 企画運営本部広報担当
各ブロック 広報係
世田谷立深沢小学校
03-3428-8931
印刷 (株)ワールドミーティング

